ッド博士も暗示する如く、ハーバートソンの區分に於いては、氣候的要因に優越的重要性が與へられてゐたが、結果する所の分類の單純性――而して余は尙ほそれに意義を附加し度いと思ふのであるが――に大なる價値を置かんとするのは余一人には止らないと思ふ。何等かの相似の圖式に於いて緣邊地(borderland)の推移現象を取扱ふことの困難は、全世界を被はなければならぬ地理學的取扱に於いては內屬的(インヘレント)であると余には思はれるのである。

（昭和八年六月二十一日稿、九月二十七日訂正）

(1) J. F. Unstead, M. A., D. Sc., A synthetic method of determining geographical regions, Geographical Journal, XLVIII, 1916, p. 230—249.
(2) A. J. Herbertson, The major natural regions: An essay in systematic geography, Geographical Journal, XXV, 1905, pp.

巨椋池の湖岸變遷と干拓事業（上編一）

吉田敬市

一、緒言

山城盆地の中央に横る巨椋池は水面積約八百町歩に過ぎない一小湖である。然し往古は現時に數倍する大湖であつて、或は淀川洪水調節用となり、或は交通上・漁業上の利用は勿論、古くより詩繪の題材となり、水生植物の寶庫として、其の利用影響は實に甚大であつた。然し古來氾濫浸水すること頻繁にして、沿岸の被害亦測り知るべからざるものがあつた。內務省土木

工事施行後は大被害稍々除去せられたが、尙湖周よりの流入水の爲め氾濫し、其の被害大であつた。依つて此を開拓し、一方此等の被害を除去する爲めに今回國營を以て干拓起工、目下事業進行中で、昭和十三年には山城盆地より全然其の姿を失ふの運命にある。此干拓事業を記念する意味に於て湖岸變遷と其の干拓事業計畫の大要を記述する次第である。

但し紙面の都合上、上下二編に分け、初回に於て巨椋池の湖岸變遷を、後半に於て其の干拓事業の一班を述べやうと思ふのである。從つて上下兩編を以て本論文は完成するものであるから讀者は右兩編を併せて通讀されん事を乞ふ次第である。

二、巨椋池の自然地理學的記載

1. 巨椋池の成因

巨椋池は地質時代の斷層湖盆の名殘にして、[1]洪積紀前半には滿々たる一大湖水であつた。向日町附近や伏見大龜谷には湖沼性貝化石が發見せられる。[2]伊勢田附近の湖成堆積層の分布等は往時大湖水であつた證である。又、沖積層中に[3]於ても舊京都市內西南部以南は既に湖底であつた。[4]其の他東山隧道掘鑿に當り舊洪積層の一準層から河口性貝化石を發見したと言ふ事であるから、一時盆地中には海水が浸入したものとも考へられる。[5]

山城盆地西方山崎・男山間の隘路を破つて大阪灣へ流出し、漸次減水干拓せられた。それと同時に山城の巨川たる木津・宇治・桂の諸川の流下する土砂の堆積に基く、デルタ建設は湖岸の縮少を來し、遂に僅かに今日其の名殘を留めてゐるに過ぎない。所謂老年期・死滅期の湖沼で湖沼分類から見れば斷層湖に屬するものであらう。

2. 面積・水深・水位變化・土質

湖水は、略々楕圓形をなし、東西約四粁、南

北約三粁、周圍約十六粁、面積九百三十ヘクタール、水深は夏季にて最深二米弱、冬季は最深〇・五米乃至一米弱にして湖底の大部分は露出する。又其の高距は海拔一〇・二米にして、山城盆地中の最低位に當る。從つて內務省土木工事前迄は、山城諸川及び、湖岸の諸水此地に聚集し爲に水位を增し、湖岸に甚大なる被害を與へて來た。[6]明治十八年の洪水にては、其の水位最低水面以上十四尺に達し、三千町歩に涉り湛水した。然し內務省の土木工事以後に於てはかゝる大被害はなくなつた。右改修工事以後に於ける水位變化につき、[7]三木學士が京都府耕地整理課所管、東一口觀測所に於て測定せられた結果より、作製せられたものを示せば次の通りである。

次表に依れば水位の最高は夏季六・七・八の三ケ月にして、五・九・十の各月此に次ぐ。最低は一月の三六にして、十二・二月の冬季に減少する。此より見れば水位年變化標式は、裏日本內陸式溫帶湖である。この水位變化は附近雨量と大體一致する事は勿論である。

湖底の形狀は稍々複雜にして、最深部は中央より稍西南に在り、大體中央より南方に深い。[8]池の東北部や東部の西目川・小倉三軒屋及び一口の內湖邊に局部的に稍深い所がある。

地底高と其の面積を示すと左の通りである。

地底高	面積（巨椋地干拓計畫書）
1 一〇米	一二三ヘクタール
2 一〇・五米	四四七ヘクタール
3 一一米	一六三ヘクタール

但し現在は右表より幾分變更してゐると思はれる。

土質

巨椋池及び附近の土質は沖積層の砂質壤土・粘土・砂・礫等の互層である。此が調査は後章述ぶる如く京都府に於て行はれ、極めて明瞭になつた。層序は各所によつて異るも一般に湖中表面は粘土・泥土が多く、其の深部には砂・礫層が

巨椋池累年月別水位變化表

年／月	大正6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平十九年—四年均
1月				37	40	27	27	23	13		36.0
2				69	46	74	33	21	10		50.6
3				57	72	101	76	41	15		69.7
4	145	99	71	78	118	70	92	46	17	55	84.0
5	47	93	38	66	121	34	185	84	54	36	107.0
6	35	80	56	86	121	40	170	105	105	51	125.4
7	100	128	113	118	203	102	196	84	159	94	172.4
8	95	112	128	136	121	66	104	56	124	65	121.4
9	115	166	118	94	146	30	93	62	124	46	111.4
10	185	177	118	40	144	48	120	81	126	40	111.8
11				26	68	38	87	63	72		70.8
12				32	31	30	50	36	53		46.4
六年—十五年平均	一〇六	一三一	九一	八八	一三九	五五	一三七	七四	一〇二	五五	

（右觀測基點の高さは大阪灣中等潮位上一〇・六七糎なり）

存在する。小倉方面には、深部に礫層があるのは過去に於て宇治川が此方面に流込んだ事を示すものである。又湖岸及び堤防附近には、砂の層が一般に厚く存在する事は、各河川の流出による土砂が堆積したものである。

水の透明度は夏季に於て一・六—二米で、フォーレル標準液の一五—一六號に相當する。從つて綠褐色を呈し常に濁つてゐる。尙水溫は上層と下層とは約十度以上の差があること珍しからずと云ふ。

現時湖岸の漁業者數十軒あり、東一口の聚落は大部分本池の漁業に從事してゐる。主な漁類は鯉・鮒等のものである。其他菱・蓮根・藻類の採取場として、又冬は此他水禽の游棲地として利用せられてゐる。

今回の干拓事業によつて此等の湖沼性漁類・植物類は殆んど湖中より姿を消すに到るであら

う。

受水區域は、湖岸一帶の平野と、其の東部の山地・丘陵地全部である。主な注入口は、降雨季には古川及び山川等によつて湖の南方に流込み平素は湖南の古川が其の主なもので、其の他沿岸の小溝によつて流入する。但し右は皆沿岸水田の灌漑用水として利用されてゐるものである。內務省改修工事前迄は淀附近の排水口から洪水時には氾濫逆流して來た。此が爲に東一口の東方に扇狀のデルタを作つた。改修工事後巨椋池の水位が低下した爲め、右のデルタが陸化し標式的な形狀となつて現はれてゐる。

近時向島の地域の二ノ丸池附近は殆んど干拓されて舊狀を失つた。加ふるに附近を奈良電が開通してから、一層原型を改め湖岸は縮少する一方である。

註　1. 新光社　日本地理風俗大系　近畿地方（上）
2. 中村新太郎氏　京都・大阪・奈良・神戸四近地質說明文　地球
3. 上治寅次郎氏に據る。
4. 塚本常雄　京都市域の變遷と其の地理學的考察　地理論叢
5. 新光社　日本地理風俗大系　近畿地方（上）
6. 內務省大阪土木出張所　淀川改良工事
7. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告　第八冊　巨椋池ノ植物生態
8. 農林省　京都府巨椋池大規模開墾計畫現形圖
9. 前掲7に同じ。

三、巨椋池の變遷

巨椋池は山城盆地成生に伴ふ一の斷層湖盆にして、地質時代に於ては、其の面積非常に廣大であつた事は既に述べた通りである。從つて自然地理學的の立場より見れば、時代が遡る程湖盆の面積は廣かつたと見るべきである。

人類が湖岸に居住する樣になつた頃も、湖盆は現在に數十倍數百倍するものであつたらう。今此湖盆變遷の時代を左記の五期に區分して、考察する事が最も合理的と思はれる。

1. 石器・古墳の分布より見たる巨椋池

山城盆地に於ける石器時代の遺物は極めて少く、其の代表的なるものは、帝大農學部敷地より發掘せられたもの位に過ぎない。資料少き石器時代の遺物を以て、先史民族生存狀態を云爲する事は、早計と思ふから此には觸れず、古墳の分布より見たる巨椋池の狀態を推測する事にする。古墳とても其の新しいものは平安朝頃まで下るから一概には言へないが、此等を一括して、地圖上に一一記載する時は、當時住民の生活場所なり、盆地內部開發の狀態を概測するの資料となり得る。此圖に依ると、石器時代の遺物又は古墳の分布地域は、盆地周緣部の洪積層の丘陵地帶に限定せられてゐる。而して其の高距は海拔四十米の等高線を以て境とされ、これ以下の地域には殆んどない。多少の例外として二十五米まで下るが、此とても洪積層の丘陵地であつて、中央平坦部には殆んど全く分布してゐない。

此の事實に據つて考へるに、上代盆地の內部は巨椋池の面積が、今日より遙かに廣かつたであらう。假令滿々たる一大湖水たらずと雖も、中央部は葭・芦生繁る濕澤地が廣く、又盆地の周邊から木津・宇治・桂・賀茂の諸川が自由な流路をとつて流れ、其末は巨椋池に注いでゐたであらう。從つて知識發達の幼稚な先住民族・原始人は、此自然の荒地を開拓する事能はず、自然の暴威に恐れ且つ左右せられて、盆地周緣部の丘陵地を其の生活場所とし、此地域より一歩も中央平坦地へ進歩し能はなかつたものと考へられる。

2. 有史以後奈良朝頃迄の巨椋池

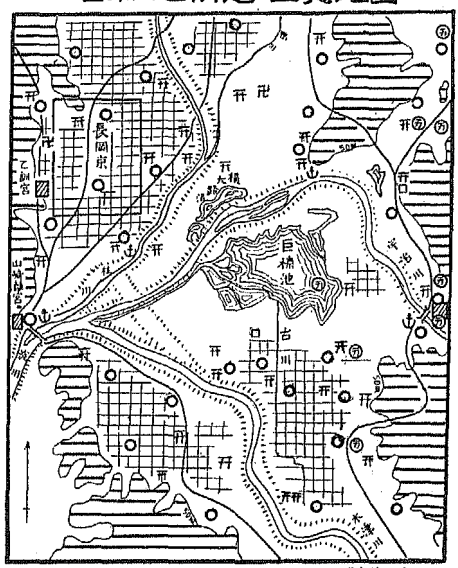
有史以後になると、盆地の內部も漸次干拓せられ、周緣部の丘陵地より中央平坦部へ開拓が進められて來たらしい。

巨椋池の名が歷史に見ゆるのは、萬葉に「巨椋の入江とよむなり射目人の伏見が田井に雁わたるらし」と出るのが、蓋し其の始であらう。當時東國街道(東國街道は、久世の鷺坂より、栗

子山を越え、宇治一ノ坂に出で、宇治の渡を渡り、三室戸・木幡・石田・山科を經、逢坂山を越え大津に出た)に沿ふ大湖にして、葭・芦湖岸に繁りその間に雁等の水禽此に棲んでゐた事が、此歌によつても想像せられる。

第一圖

巨椋池附近歴史地圖



第一圖

奈良朝天平時代迄は、東は宇治川を隔てて木幡沼まで、北は横大路沼まで連續する一大湖沼であつた。從つて湖面は尚現在に何倍かの大きなものであつた。然し、諸河川が四方より此巨椋池に向つて求心的に流れ合ひ、其の流路には各々川の流れの方向に幾多の島や洲を作り、地形は極めて複雜であつたやうである。此狀態は豐臣秀吉が伏見城を築き、附近に土木工事を施行する頃まで、略々同一な狀態にあつたと考へられる。

次に當時に於ける湖岸の狀態を知る資料として、條里遺蹟を擧げたい。山城盆地に條里が施行されてゐた事は一點の疑もなき所である。此條里實施も其の時代必ずしも奈良朝以前とは限られないし、又湖岸に實施された時代は明かでないが、一般的に盆地內部の條里施行は、奈良朝以前のが多いやうだから、假に此區域の條里も奈良朝以前のものとして取扱ふことにしやう此條里遺蹟は記錄の外、現在の道路・溝洫・境界・聚落・湖沼等

が或一定の間隔を以て排列され、地割は或一定の長さによつて統制されてゐる事實、坪といふ條里呼稱の名を示す小字名の存在等によつて其の實施せられてゐた事を證明する事を得る。

今此等の材料に據り第一圖の如き巨椋池を中心とした附近の條里施行地々圖を作製した。此圖に依つて考ふるに、條里を施行されてゐなかつた地域は當時巨椋池の湖岸一帶の地域にして(濕澤地・葭芦生繁つた地で)、善良なる耕作地でなかつた、又河川の流域は洪水毎に自由流路をとる所謂荒川で危險區域であつたから、同樣條里制を施行する事の出來得る耕地でなかつたと思はれる。若し右の如き推定が事實とすれば、當時に於ける湖岸區域が復原される。此によると前記天平年間の湖水面積と略合致する。それ以外に、西は淀・美豆方面より、北は横大路・下鳥羽・三栖方面まで、南は伊勢田・林・市田・森に引く一線以北の地に其の遺蹟を見ず、只不思議に思はれるのは、牧島村の中央部に數ヶ所、坪の名が散見する事である。此は豐公時代まで横島といふ單一なる島であつたが、農耕に適するので早くから開拓され、宇治の里人等が此を耕したものと考へられる。但し條里遺蹟が三川流域に欠如するのは當時施行されたが、後洪水や河川流路の變遷に基いて自然に或は人爲的に消滅したものもあるであらう。

尙湖岸一帶に分布する聚落・神社・佛寺等を見るに、奈良朝以前より所在するものは、第一圖に示す如く聚落には湖東に宇治[2]・岡屋・木幡・石田等があり、湖北に伏見、湖西に奈羅、湖南に列栗・栗隈・小倉(巨椋)・殖栗等の諸邑があつた。神社・佛寺には、許波多神社[3]・宇治神社・藥蓮寺(佐山村)等があり、今木[4]・岡屋・栗隈・巨椋・水主・宇治等の諸連が此地方に早くより住居してゐた。此等の資料に據つても、平安遷都以前の巨椋池湖岸の範圍を或程度まで復原する事が出來る。此等に據つて當時の湖岸を考察するに既に述べた如く其の範圍は今日より遙かに廣く

川は巨椋池に流れ合ひ、湖岸は濕澤地にして、耕地が少かつたやうである。從つて聚落も神社・佛寺も今日より遙か湖岸から離れた地點に散在してゐた事は勿論である。

註 1.新光社　日本地理風俗大系　近畿地方（上）
2.和名抄鄕名　3.延喜式內社　4.姓氏錄

3.平安遷都後豐公土木工事頃迄の巨椋池

平安遷都は山城盆地開拓の一大劃期をなすものである。即ち遷都により、平安京造營と共に盆地內の交通・產業・其の他に積極的施設を見た。今迄荒川で、一洪水毎に右に左に流路を變遷したであらう盆地內の諸川も、或所には堤防を築き、河道を修め、橋梁を架し、原野・濕澤地は耕拓せられて良田となり、聚落は中央平坦地の新田に進出し、神社・佛寺等此に伴ふて盛に遷宮建立を見た。

然し中央巨椋池沿岸のみは、尙且つ十分なる開拓の手は下されなかつたらしく、豐公が伏見に築城し、附近に一大土木工事が施行さるゝ迄は巨椋池又は、山城三川河道變遷の事を記載する資料は殆んど見當らぬ。只僅かに當時の公卿や旅人等の日記や源平時代の軍記物等によつて其の當時の姿を想像するに過ぎない。

既に一寸述べた和名抄鄕名や、延喜式の神社又當時の聚落・交通路・港市等を圖上に記載して見るに、巨椋池沿岸一帶の地には此等は殆んど存在せぬのである。時に神社等が存在するのは多くは、產土神・氏神にあらずして、他より移遷して來た、川や海の神が多い。此等は湖岸又は三川流域地方民が如何に當時水害の厄難に苦んだかを物語る記念物とも考へられる。

そして、巨椋池の面積も、天平時代頃の大きさに殆んど大差なかつた。即ち北は伏見・三栖・橫大路・富森邊まで、西は乙訓郡淀村より南美豆・御牧の一部分まで、南は前に述べた市田・佐古・林・伊勢田に引く一線まで灣入し、東は、宇治町まで巨椋池の水が續き、宇治村岡本・岡屋・六地藏附近まで湖であつたらう。そして其湖中には川の流路と同じ方向に幾多の島や洲が

竝び湖とも川ともつかぬもので、地形は極めて錯雜してゐたであらう。然し木津川のみは直接巨椋池へは流入せず其の下流は間接に巨椋池と連續してゐたやうである。

桂川は、現在の横大路の邊より眞南に巨椋池に注いでゐたらしいが、之を證明すべき資料は薄弱である。只德[2]川時代の地誌類中に記載したに過ぎない。

然し一般に水量が今日より遙かに多く、舟運の便は各川共大いに開け盛であつた。有史以來宇治川を遡航して琵琶湖に出でたと思はれる記事が日[3]本書紀の繼體天皇の段と、垂仁[4]・欽明[5]の二朝とに出てゐる。而して此宇治川遡航につき遡[6]航說と非遡航說とがある。現在の狀態を見た眼で當時を推測すれば、到底遡航は不可能としか考へられない。然し山城盆地全體が隆起してゐるし、加ふるに水量がどれだけ減じたか判らない。此等の諸點を考慮して上代の狀態を推測しなければならぬ。現在は、巨椋池の高さ海拔約十米であるが、假に今より五米沈降し、宇治川の水量が現在の二倍だとすれば、其の通航はさまで困難とは思はれない。

右は單に宇治川のみならず、木津川も桂川も同樣である。桂川は上古舟運による丹波との往來があつたと言はれ、又保元物語に左大臣賴長が梅津から舟で桂川を下り、木津に上陸した記事がある。梅津・大井津は平安時代に於ける桂川筋の要津で、恰も木津川に於ける木津・宇治川に於ける宇治の津に相當してゐた。

木津川は仁德紀に皇后南紀より浪速に上陸されず、淀川を遡航して木津に上陸された記事があり、持統天皇藤原京御造營の際、木材を江州瀨田より流下し、宇治川により巨椋池を經由し、木津川遡航で木津に陸上せられた當時の記事が萬葉民役歌に手にとる如く記述せられてゐる。此記事等も今日の地形より見れば、道順大迂廻せなければならないが、宇治川と巨椋池、木津川とが相接してゐた時代には、何等勞せずし

て、安易に運搬する事が出來たであらう。

かく上代は水量豊であつたが、上流地方森林亂伐其の他の關係上流水量を減じた。此事情を物語る興味ある事實は淀の水車である。淀の水車は、淀城用水吸入用として天正七年に創設した。初は車の直徑八間、一日に種油六升を注いだと言はれてゐる。それが川底が漸次淺くなるに伴ひ直徑を縮少し、慶應三年には四間となつたが、尚妨げとなるので三間半にした。依つてその間二百九十三年に四間半減少してゐるから、一ヶ年平均車の直徑は一寸一分二厘强宛短くなつてゐる。此より換算すれば年々平均四分六厘强宛河底が淺くなつた事になる。驚くべき力ではないか。近々三百年足らずでかくの如き大變化である。いはんや千年二千年前の長年月に於ておやである。

千數百年前に於ては宇治川遡航可能であつたとする論も此例より考察して、當然な推測だと思ふ。

近時の如く各河川及び巨椋池が甚だしく、水位の底下を來した事は內務省河川工事が其の直接原因で此は後述する所である。

4 木津・宇治・桂の諸川の流路變遷と巨椋池

木津・宇治・桂の諸川は盆地の周緣部より流れ來り、山崎・八幡間にて落合つてゐるが、明治初年頃迄は淀附近にて流れ合つてゐた。淀の地名は、顯注密勘に記されてゐる通り三川の落合ふて水が流れよどむので名附けられた事でも判る。然し其の淀の發生も、今日の地形に略々等しくなつたのは、後述する如く豊公以來の事である。その以前は淀の地は湖中の島で右三川は巨椋池で流合つてゐたと言はれてゐる。今其の概要を述べると次の通りである。

宇治川は、宇治町と槇島村との間より西方に流れ、小倉村の北、三軒家の側で巨椋池に流れ込んでゐた。此が本流で其の他分流が、幾條にもなつて北又は北西の方向に流れ、その間に槇島・大八木島・上島・下島等の島や洲が川の流れ

の方向に竝んでゐた。

今日附近の地を踏査するに、槇島村・小倉村間に立派な堤防が殘り、土地の人は此を俗にエンバ堤と呼んでゐる。堤は北方に一つで南側にない。此は南側は高くて高堤防の必要なく、低いものがあつたかも知れなが今日はない。堤防の南側に沿ふて小溝が通じてゐる。その溝の中には黑色の厚い礫が多く掘出される。此石礫は現在宇治川の礫と全く同質のものである。然しこの礫のみでは、流路を決定する資料とはならない。何故ならば一時的洪水によつても、礫を流下するからである。然し堤防北側には殆んど掘出されず、又後述する巨椋池ボーリングの結果は此を立證するし、其の他堤防が存在する事實、又は記錄等によつて豐公頃迄宇治川は、此流路をとつてゐた事は事實である。豐公が伏見港市建設に伴ひ、向島・槇島・宇治間の槇島堤を築き、本流を伏見に導いてより遂に今日の如くなつたものである。

又、大正九年京都府土木課に於て調査された巨椋池水深圖及び昭和二年農林省に於て同じく調査された水深圖を見るに同樣、三軒家の西方舊宇治川が巨椋池に落込む附近が非常に深い。此に就て、可知農林省技師（巨椋池開墾國營工事事務所長）は、次の如く語られた。「此の部分が局部的に水深大なるは、舊宇治川が巨椋池に流入する所にして、洪水時に於て急激なる水力によつて侵蝕されたものと思はれる。かくの如き例は、此處のみならず、同一條件の所に於ては數多く見られる所である。」

槇島村の地內は元幾つかの島島が散在せし地域にして、三軒家の北方三角點（一五・六米）附近の小字名を落合と稱へ、其の東南に大川原、中川原の地名がある。そして宇治川より、その落合に向け現在も小溝があつて用水路となつてゐるし、槇島堤の側には小池が二つ東西の方向に竝んでゐる。此は元の舊河道と思はれる。尙其の北方東目川の部落から西目川の部落に小溝あ

り、湖沼もあるのも舊河床と思はれる。槇島堤の東目川と巨椋堤(小倉堤)の西目川とは豐公が此兩堤防を築くまでは、川によつて往來が自由であつた。其の證には、僧周鳳の著である善隣國寶記に建治元年正月十八日蒙古人二人、高麗人一人、明州人一人自鎮西送、之皆不入洛中、自山崎經岡屋醍醐赴關東とある。此即ち元使東上の道順である。山崎より京都に入らずに岡屋醍醐經由關東に赴いたのであるから、船で巨椋池を横斷した事は事實である。前記の東目川附近で宇治川を渡り、岡屋に上る渡口を隱元渡しといふ。此は隱元和尚と關係ある渡で名づけたらしい。又鴨長明の方丈記に「岡屋に行きかふ舟といふは此所往返の舟なり云々」とあり、確に此所は古くから巨椋池を横斷して岡屋上陸、東國に向ふ者の通路であつた事が判る。

又、攝津・河內方面より宇治行の者は、洞ヶ峠を越え、那羅・岩田を經て、封戸の渡で木津川を渡り、次に巨椋池畔の一口に出で、此所より船で小倉に出て前記の舊宇治川を遡航して宇治に出た。陸路は右封戸渡から御牧村の巨椋池南岸を東に宇治に至るものがあつた。又京都に入るには伏見又は、鳥羽・三栖方面に出たのでやはり湖上舟運であつた。

かく宇治川は幾多の島や州を作つて其の間を川は幾條にもなつて流れてゐたから、時に伏見から宇治・奈良方面に向ふ旅人は度々道迷した事があつた。玉葉の安元二年十一月廿二日の條[10]に丹波津で道迷ひした記事がある。今日丹波津といふ地名も見出さぬし、又原文では當時宇治川や巨椋池附近の地形が全く想像し得られない、今日想像し得ない程複雜な地形であつたのだらう。されば道迷もしたのであらう。但し伏見から宇治川を遡航して直ちに宇治に出られたのは事實で、宗長手記によると、伏見から尺八・笛等吹き宇治の水車を眺め喜び興じながら上つてゐる。又季瓊日記其他にも宇治川遡航の記事は數多く出る。其他前記長明の方丈記にも

同様伏見・宇治間の舟運を記載してある。故に當時の巨椋池は、宇治・小倉・伏見・淀方面まで一連の湖水で其中に島や洲が多く茲んでゐたと見るのは、眞に近いやうである。

伊勢に於ける輪中地域の地誌（一）

辻井浩太郎

目次

一、序言
二、特殊景觀の概說
三、土地の開發と景觀の變遷
四、景觀構成要素の分析
1、堤塘と溝渠
2、聚落
3、民家
4、飲料水
5、土地利用
五、人口
六、結語
（參考文獻）

一、序言

三重縣の北端即ち伊勢・尾張・美濃の三國相接するの地は、伊勢海と敦賀灣を連ぬる地質構造上の横斷坼裂線に當り、地形學的には斷層窪地の一部をなしてゐるため、濃尾平野を流るる木曾・長良・揖斐の三大川はここに集つて伊勢海に注いでゐる。而して此の河口につくる低平卑濕の三角洲は、古來大洪水頻發の地で、西濃平野の南に續く輪中地域として特殊の景觀を持つてゐる。

輪中に就いては、最近別技篤彥學士が地理論